

リトアニアからみたウクライナ問題

重松 尚

はじめに

二〇二三年一月にヤヌコーヴィチ政権がEUとの連合協定調印を延期したことをきっかけに混乱したウクライナ情勢は、バルト諸国でも連日大きく報じられてきた。ソ連による「併合」の歴史が今なお鮮明に記憶されているバルト諸国にとって、ウクライナが抱える問題は決して対岸の火事などではない。リトアニアにおいては、バルト諸国のなかでも最も地理的にウクライナに近く、また中世以降の歴史をウクライナと共有していることもあって、エストニ

アやラトヴィア以上にこの問題が深刻に捉えられていた。また、リトアニアがEU理事会の議長国としてウクライナとの連合協定調印を推し進める立場にあったことも、リトアニアがウクライナ情勢を特に重要視していた理由の一つとして挙げられる。

日本や欧米のメディアではウクライナ情勢を「親露派」と「親欧米派」の対立として捉えることが多く、こうした単純な図式による見方に対しては批判も少なくないが、リトアニアにおいても同様に〈東〉のロシアと〈西〉のヨーロッパの相克として昨今のウクライナ情勢が捉えられることが多い。そして、こうした〈東〉と〈西〉の認識は、リトアニアではウクライナが危機に陥る以前から広く共有さ

れていたものでもあった。

本稿ではまず、一連のウクライナ情勢に対してリトアニアがどのような反応を見せたかを時系列的に見ていく。その後、リトアニアがEUの東方政策に積極的である理由を、リトアニアにおいて〈東〉と〈西〉がどのように認識されているのかという視点から考えてみたい。最後に、二〇一四年二月にリトアニアの首都ヴィルニウスで行われたランスベルギス元最高会議議長の演説を紹介したい。というのも、ウクライナ情勢に言及した彼の演説には、リトアニアの〈東〉と〈西〉の認識がよく表れているからである。

I ウクライナ情勢に対する リトアニアの対応

1 EU理事会議長国就任から

東方パートナーシップ首脳会議まで

二〇一三年七月から半年間、輪番制のEU理事会議長国をリトアニアが務めることとなり、リトアニアはこれを自

また、二〇一二年三月の連合協定仮調印以降EUが課題として挙げていた、選挙制度や検察総局、ビジネス環境、汚職問題の改善に向けて法改正が必要との認識も示した^{*1}。そして、東方パートナーシップ首脳会議まで残り二カ月となったことでロシアからのウクライナに対する圧力が強まるであろう、とした上で、その圧力に耐えるようヤヌコーヴィチ大統領に呼びかけた。さらに、グリーバウスカイト大統領は同月行われた国連総会にて一般討論演説を行い、ロシアがエネルギーなどを自国の影響力拡大のための手段として使用することを激しく非難した。またグリーバウスカイト大統領は一月、EUが国際通貨基金（IMF）との交渉によりウクライナを支援する用意があると発言し、欧州の一員としてロシアからの経済的圧力に対抗するようヤヌコーヴィチ政権に促した。

ウクライナ側では、一月に、検察に関する法案、およびテイモシエンコ元首相の釈放を目的とする、受刑者の国外治療に関する法案が最高会議で審議された。加えて、選挙法改正案が採択された。これは、リトアニアでは連合協定調印に向けた進展として好意的に捉えられたが、しかし東方パートナーシップ首脳会議が目前に迫った同月二一日、ウクライナ政府はEUとの連合協定調印に向けた準備

国の利益をEUの政策に反映させる絶好の機会と捉えていた（Viipisaukas et al. 2013）。そして、旧ソ連諸国とEUの関係強化をその間の外交方針の一つに掲げ、より具体的には、旧ソ連諸国六カ国（アゼルバイジャン、アルメニア、ウクライナ、グルジア、ベラルーシ、モルドヴァ）の首脳らを招いて一月にヴィルニウスで開催されるEU東方パートナーシップ（EaP）首脳会議を、議長国を務める半年間で最も重要な行事と位置づけていた。さらにいえば、この首脳会議におけるウクライナとの連合協定の調印がリトアニアにとってこの時期最大の外交目標でもあった。

したがって、東方パートナーシップ首脳会議開催に至るまでのあいだ、リトアニアのグリーバウスカイト大統領およびリンケヴィチユス外相は、リトアニア一国だけではなく、EU全体を代表する立場から、ウクライナ政府と連合協定調印に向けた会談を精力的に行った。九月、グリーバウスカイト大統領は、ウクライナのヤルタに政財界の有力者を集めて開かれた会議にEUの代表として出席し、ウクライナのヤヌコーヴィチ大統領と会談した。この会議でグリーバウスカイト大統領は、当時獄中にあったテイモシエンコ元首相を釈放し恣意的司法の問題を解決するよう、ヤヌコーヴィチ政権に求めた。グリーバウスカイト大統領は

プロセスを一時停止する旨を閣議で決定した。リトアニアのリンケヴィチユス外相はこの閣議決定に対して失望感を表し、ヤヌコーヴィチ大統領はウクライナ国民の欧州統合への熱意に応える責任がある、との声明を出した^{*2}。グリーバウスカイト、ヤヌコーヴィチ両大統領は閣議決定前に電話会談を行っており、そのなかでヤヌコーヴィチ大統領は、ロシアからの経済的圧力と脅迫を調印延期の理由として挙げた。リトアニアのヨヴィタ・ネリユプシエネ外交政策担当大統領首席補佐官によれば、ヤヌコーヴィチ大統領は、ロシアがウクライナ東部からの輸入を制限すればウクライナ経済は大きな被害を受け、数十万人のウクライナ国民の雇用が守れなくなる、とグリーバウスカイト大統領側に伝えていたという^{*3}。

このように、リトアニアはウクライナの連合協定調印に向けて積極的に外交交渉を続けたが、結局「持たざる小国」であるリトアニアはロシアに対抗できるだけの有効な手段をとることはできず、その圧力に屈しないようヤヌコーヴィチ政権にただ呼びかけ続けることしかできなかった。その結果、リトアニアが東方パートナーシップ首脳会議において最も期待していたウクライナとの連合協定調印は達成されなかった。

2 対ヤヌコーヴィチ抗議デモに対する リトアニアの反応

ヤヌコーヴィチ政権が連合協定の調印を見送ったことを受け、キエフ中心部ではヤヌコーヴィチ大統領の退陣を求める抗議デモが発生し、ウクライナの野党指導者らがこのデモに参加した。リトアニアのグラウジニエネ国会議長（与党・労働党 (Darbo partija) 所属）は、東方パートナーシップ首脳会議を直前に控えた一月二六日、キルキラス副議長（与党・リトアニア社会民主党 (Lietuvos socialdemokratų partija 以下「社会民主党」）所属）およびアウシュトレヴィチユス副議長（野党・リトアニア共和国自由運動 (Lietuvos Respublikos liberalų sąjūdis) 所属）とともにウクライナを訪問し、この抗議デモに参加し、ウクライナ野党を支持する姿勢を明確に示した。これに対してヤヌコーヴィチ政権はヤヌコリス駐ウクライナ・リトアニア公使を外務省に召喚し、国会議長らが野党のデモに参加したことに関して説明を求めるなどした。^{*4}

そして東方パートナーシップ首脳会議終了後の三〇日、ウクライナの特務部隊がデモの強制排除を命じると、リトアニアのリンケヴィチユス外相は同日、ウクライナ当局ではなくむしろ解決策であるとリトアニア政府は考えており、引き続きウクライナにおける抗議デモに対しては理解を示しつつ、ヤヌコーヴィチ政権に対しては野党との対話と連合協定調印を求めてきた。^{*5}

一月一七日、ヤヌコーヴィチ大統領は反抗議活動法に署名した。その後、警察当局が抗議デモの強制排除を試み抗議活動家と衝突し、多数の犠牲者を生む事態となった。リトアニア外務省は二二日、犠牲者の遺族に哀悼の意を表し、ウクライナ当局による武力行使を非難した。^{*10}翌日、リトアニア国会も同様に武力行使を非難した。^{*11}この日、リトアニア外務省はジョウテンコ駐リトアニア・ウクライナ大使を召喚し、武力行使を非難し中止を要請した。^{*12}翌二四日にはグリーバウスカイト大統領も同大使を大統領府に召喚し、同じく武力行使をやめるよう非難した。^{*13}

リトアニア政府はさらに、警察当局との衝突により負傷した抗議活動家を治療のためにヴィルニユスに受け入れた。二月五日、リトアニア政府は負傷者の治療のために一五万リタス（約四万三千ユーロ）を当てる旨の閣議決定を行った。グリーバウスカイト大統領は、負傷者の見舞いのために病院を複数回訪問したが、その負傷者のなかには、ヤヌコーヴィチ政権崩壊後に文化青少年相を務めることに

よる武力行使を懸念する声明を出し、市民の人権を尊重するようウクライナ政府に求めた。^{*5}また翌月二日にはリトアニア外務省がジョウテンコ駐リトアニア・ウクライナ大使を召喚し、ウクライナ当局によるデモの強制排除について懸念を表明した。同月三日にはリトアニア国会で、野党や市民社会の指導者と対話を行い、武力行使を抑制するようウクライナ当局に要請する決議が採択された。^{*6}同月九日から一〇日にかけてウクライナの警察特殊部隊が抗議デモ参加者と激しく衝突し、負傷者を出す事態に発展したことを受け、リトアニアのリンケヴィチユス外相はこれを非難する声明を出した。^{*7}同外相は同月一三日、EUの特使としてウクライナを訪問し、コジヤラ・ウクライナ外相やクリュエウ国家安全保障国防会議書記らと会談。リンケヴィチユス外相は、抗議デモに対する暴力行為をやめ、野党との対話に応じるよう要請した。^{*8}

二〇一四年に入りEU理事会議長国としての任期を終えた後も、リトアニアの与野党は積極的にウクライナ問題解決に向けた外交を続けた。彼らの考える「解決」とは、もちろんウクライナの欧州統合へ向けた前進のことである。

リンケヴィチユス外相の言葉にあるように、ウクライナとEUとの連合協定の調印はウクライナにおける混乱の原因なるプラトウ氏も含まれていた。

このように、対ヤヌコーヴィチ抗議デモが発生して以降、リトアニア政府は一貫して抗議デモの支持を表明し続けてきた。リトアニアにおいては政権与党だけでなく野党も抗議デモを支持した。特に野党の祖国連合「リトアニア・キリスト教民主党 (Tėvynės sąjunga-Lietuvos Kristijonų demokratų partija 以下「祖国連合」) はリトアニア国内では保守派と称され、与党の社会民主党よりも対ロシア強硬姿勢を強く打ち出している。そのため同党は、欧州統合を進めるウクライナ野党の支持を続けてきた。こうした状況から、リトアニアの国会でヤヌコーヴィチ政権による武力行使を非難する声明がほぼ全会一致（賛成八八、反対〇、棄権三）で採択されたのであった。^{*14}

このように対ヤヌコーヴィチ抗議デモを支持していたリトアニアの与野党が、二月のヤヌコーヴィチ政権崩壊の流れを歓迎したことは想像に難くない。ウクライナ最高会議が二日にヤヌコーヴィチ大統領解任を決議すると、リトアニア外務省はこれを「ウクライナにおける民主的変化」として全面的に歓迎する声明を发出した。選挙によってウクライナ国民から選ばれた大統領を最高会議が憲法に反して解任したことをリトアニア政府が「民主的」としたの

は、連合協定調印を拒否したことによりヤヌコーヴィチ大統領が「大多数のウクライナ国民の期待を失望させた」と考えていたからである。リトアニア外務省は声明のなかで「愛する祖国の自由のために犠牲となったウクライナの英雄を永遠に忘れない」と述べており、ヤヌコーヴィチ大統領と戦ったウクライナ市民を英雄視した。^{*15}

3 クリミアおよびウクライナ東部における 軍事衝突とリトアニア

クリミアで武装集団により地方議会や行政府が占拠されると、リトアニア政府はこの武装集団を「分離主義者」として非難した。グリーバウスカйте大統領は二七日、二三日に大統領代行に任命されたトルチノウ最高会議議長と電話会談を行い、そのなかでウクライナの主権および領土の一体性を支持する考えを示した。

クリミアでは三月に住民投票が行われ、ロシアへの編入が支持された。これに対してリトアニア政府は、この住民投票はウクライナ憲法に反するため認められるべきものではないとの見解を示し、これを非難した。これは、二月に最高会議が違憲ながらヤヌコーヴィチ大統領の解任を決議

したことに對する好意的な反応とは対照的であり、こうしたリトアニア政府の態度はダブル・スタンダードと批判されかねないものでもあった。

三月、クリミアにおいて軍事的緊張が高まると、リトアニアではロシアの介入に對する批判が高まった。東京を訪問中だったリンケヴィチユス外相は一日、都内で行われた記者会見でロシアが国連憲章に違反して主権国家のウクライナを侵略している、との見解を示した。また一四日にはグラウジニエネ国会議長がエストニアおよびラトヴィアの国会議長とともにロシアによるウクライナ侵攻を非難する共同声明を出した。グラウジニエネ議長は一六日にウクライナを訪問し、翌日、ウクライナおよびポーランドの国会議長とともにロシアの侵略行為を非難する共同声明を出した。一八日にロシアのプーチン大統領がクリミアのロシア編入に関する条約に署名すると、一九日、リトアニア外務省は国際法違反としてこれに抗議した。^{*16}

ウクライナ東部のドネツィク州およびルハンシク州で軍事衝突が起きると、リトアニア政府は反政府武装勢力を「分離主義者」「テロリスト」と呼び、また、武装勢力の背後にはロシアによる支援があるととして、同政府を非難した。リトアニアは二〇一四年より国連安全保障理事会の非

常任理事国を務めており、ウクライナ情勢に関する緊急会合においても反政府武装勢力およびロシア政府を強く非難している。

ウクライナ情勢が緊迫化するなか、リトアニアは軍事的強化にも努めている。NATO加盟一〇周年を迎えた三月二九日、リトアニアの与野党が国防費を対GDP比二パーセントまで増額することで合意し、大統領もこれに賛同した。六月にはバルト諸国各地で米軍による合同軍事演習

「セイバー・ストライク (Saber Strike)」が行われ、リトアニア軍もこれに参加した。またリトアニアは、ウクライナ西部リヴィウ州で行われた合同軍事演習「ラピッド・トライデント (Rapid Trident)」にも参加することで、NATOおよびウクライナとの連帯を示した。さらに九月一九日、リトアニア、ウクライナ、ポーランドの三カ国は、合同旅団の創設で合意した。この合同旅団は、大ロシアに對抗できるだけの十分な軍力を有するとはいえず、その実効性は限定的である。しかし、今日の三カ国の領土の大半をその版図として東の隣国ロシアと對抗した、かつてのポーランド・リトアニア「共和国」が誕生した地でもある

ルブリンに合同旅団の司令部が置かれることから分かるように、三カ国がともに連帯してロシアに對抗する意志を

示したという象徴的な意味は大きい。

リトアニアでは、ウクライナ情勢が緊迫化して以降、国内各地でウクライナを支持する催しが行われ、多くのリトアニア市民がこれに参加している。各地でウクライナ国旗が掲げられるようになり、ウクライナの国旗や国章があらわれた服を着た人を街中で見かけるのも珍しくなくなった。政府レベルだけでなく、市民レベルでもウクライナとの連帯がことあるごとに強調されている。

以上見てきたように、リトアニア政府は、東方パートナーシップ首脳会議開催まではEU理事会議長国としてヤヌコーヴィチ政権と交渉を続けたが、結局連合協定調印という成果を上げることができなかった。その後は抗議デモを支持し、ヤヌコーヴィチ大統領に對しては早期退陣を求めようになった。そしてクリミア半島およびウクライナ東部で軍事的緊張が高まると、リトアニアはウクライナ政府を支持し、ロシアを公然と非難した。

先に述べたように、リトアニア政府は、ウクライナ政府がEUとの連合協定に調印することで問題が解決すると考え、そのようにウクライナ側に働きかけてきた。しかしそれとは逆に、グリーバウスカйте大統領をはじめとする「EU代表」が、ウクライナ政府に對して「(圧政の) ロシ

アか（自由と民主主義の）「ヨーロッパか」の二者択一を迫ったことがウクライナ国家分裂を招いてしまった、という指摘もある（石郷岡二〇一四：八）。実のところ、こうした〈東〉のロシアと〈西〉のヨーロッパを二項対立とする見方はリトアニアでは広く共有されており、今回の件ではリトアニア政府がその認識をウクライナ側に押しつけた形となった。次章では、リトアニアにおいて〈東〉のロシアと〈西〉のヨーロッパがどのように認識されているのかを探る。

II リトアニアにおける〈東〉と〈西〉

1 〈東〉と〈西〉のイメージ

第一次世界大戦後にロシア帝国からの独立を果たしたりトアニアにおいては、一九四〇年にソ連に編入されると、激しい対ソ抵抗運動が繰り広げられた。抵抗運動に携わった者は、リトアニアが独立を回復した現在では「祖国の独立のために戦った勇敢な愛国者」とされる。そして独立を

奪われていたソ連時代は「間違った歴史 (false history)」と認識される (Leht 2006: 71)。すなわち、独立国家がリトアニアのあるべき姿であって、独立が失われた状態は本来あるべきものではない、ということである。

すでに「欧州への回帰」を掲げていた周辺の旧東欧諸国と同様に、リトアニアも一九九〇年代後半から「欧州への回帰」を政策方針に掲げるようになり、EUおよびNATOへの加盟を目標とした。「欧州への回帰」が正しい道とされた（そして現在でもされている）リトアニアでは、〈東〉と〈西〉という二項対立の概念はあらゆる場面で用いられる。〈東〉は貧困や不安定、不安感などと関連付けられ、他方で〈西〉は繁栄や安全、民主主義を連想させる (Miniotaitė 2003: 214)。リトアニアにおいて間違っていると思われるものや道義に反するとされるものは、すべてソ連時代からの負の遺産とされたり、あるいは現在のロシアの政治のせいとされたりする、とも指摘される (Vonderau 2008: 226)。つまり、〈東〉は単に空間軸において東（すなわちロシア）を指すだけでなく、時間軸において過去のソ連時代を指すこともある。ゆえに〈東〉と〈西〉には、暗い過去と明るい未来、あるいは後進性と先進性というイメージも含まれる。

こうした〈東〉と〈西〉のイメージはリトアニア社会において広く浸透しているといえよう。具体例を一つ挙げてみよう。リトアニアで代表的な週刊誌『ヴェイダス (Veidas)』が二〇〇五年四月二八日号でEU加盟一周年を記念して「欧州への長い道のり」という特集を組んだ。この号の表紙には三人の男の写真が掲載されており、左から

「ホモ・ソヴィエティクス (Homo Sovieticus) 一九四〇〜一九九〇」「ホモ・リトヴァヌス (Homo Lituanus) 一九九〇〜二〇〇四」「ホモ・エウロパエウス (Homo Europaeus) 二〇〇四〜二〇〇五」という題が付けられている (Vonderau 2008: 225)。それぞれ「ソヴェト人」「リトアニア人」「ヨーロッパ人」として人類の進化になぞらえて描かれており、はじめは貧しい服装でノコギリを手にしていた男も、最後にはスーツ姿でノートパソコンを片手にその先の未来を見据える新人類に「進化」している。「欧州への回帰」は、あたかも野蠻から文明への「進化」であったかのようなのである。

世界を〈東〉と〈西〉に分ける考えは決してリトアニアのみに特有のものではなく、ユーラシア世界全体においてもさまざまな形で表される（塩川ほか二〇一三）。ロシアでは、自国を〈東〉（＝アジア）でも〈西〉（＝ヨーロッパ）

でもない「ユーラシア」という独自の世界であるととするユーラシア主義も生まれた（浜二〇一〇）。しかし、リトアニアにおいて〈東〉は、右の例からも明らかのように、アジアではなくロシアやソヴェトを表すのであり、したがってロシアのユーラシア主義はリトアニアでは〈東〉そのものとして捉えられる。

このような認識が行き渡っているリトアニアにおいて、一連のウクライナ危機は、〈西〉の民主主義的文明と〈東〉の専制主義的野蠻の相克と見なされ、〈東〉が諸悪の根源とされる。リトアニア国内での〈東〉と〈西〉の認識は、このように国際関係にもそのまま投影されているのである。

2 東方政策に積極的なリトアニア

独立を回復したリトアニアはその後、「ソ連に占領されていた小国」という悲観的でネガティブなアイデンティティを捨て去り、民主主義を取り戻すことに成功したヨーロッパの国というポジティブなアイデンティティを構築していった。「欧州への回帰」を通じて民主化の「優等生」を演じ続けたのである。

リトアニアは二〇〇四年のEU加盟以降、EUの欧州近

隣諸国政策（ENP）、そのなかでも旧ソ連諸国を対象とする東方の近隣諸国政策（二〇〇九年以降の東方パートナーシップ）に積極的な役割を果たそうとした。パウラウスカス大統領代行（当時）はEU加盟直後の二〇〇四年五月、リトアニアは、東方地域も含めた広い地域のリーダーとして「EUが東へのさらなる進出を決定するよう勧める」と語っている。^{*17} EU加盟という目標を達成したリトアニアは、単なる民主化の「優等生」という立場に甘んじず、今度は民主化を指導する「教師」として旧ソ連諸国に対して影響力を行使しようとしたのである（Jakubaitė 2009: 125）。

EUの東方政策でリトアニアが中心的な役割を担い、その結果としてバルト諸国以外の旧ソ連諸国の欧州統合も進めば、EUとロシアの境界はさらに東に押し広げられ、リトアニアは地理的にヨーロッパの辺境地域ではなくなる。このような思惑から、リトアニアなどのバルト諸国は東方政策に積極的であると考えられるという（Haukkala 2009: 166）。つまり、リトアニアにとってこれは、二重の意味で「完全な」ヨーロッパになれる機会でもあった。ゆえにEUおよびNATO加盟後のリトアニアは、近年ロシアとの対立が深まっているウクライナやグルジアを支援してきた

地売却の違法化であった。外国人への土地売却の違法化はEU法に抵触するものであり、したがって実際に憲法が改正された場合はEUからの脱退を余儀なくされる、との批判もあったが、リトアニア国内の欧州懐疑派は、「我々の土地は売却しない。ブリュッセルには屈しない」「EUとは距離を置き、自国の主権を守ろう」というスローガンのもと、国民投票を推進していた。欧州懐疑派はまた、これとは別に二〇一五年一月に予定されていた通貨ユーロの導入にも反対していた。

彼らにとってはリトアニアの領土も自国通貨リタスマリトアニア独立の象徴であり、ゆえにそれらが失われるのは独立国家リトアニアに対する新たな脅威でもあった。彼らはリトアニアの欧州への統合を進めてきた国内の主要政党を批判していたが、だからといって親露派というわけでは決していない。彼らが望んでいたのは、〈西〉でも〈東〉でもない主権国家リトアニアである。

さまざまな政治家らがこの国民投票の発起人に加わったが、彼らのほとんどは国会に議席を持たない泡沫政党に所属しており、国政での影響力は非常に限られていた。興味深いのは、左派から極右まで幅広い泡沫政党がこの国民投票の発起人に加わった点である。国民投票実施を支持した

し、その他の東方パートナーシップ対象国に対してもさらなる民主化を働きかけている。そして未だこの地域で大きな影響力を有するロシアをことあるごとに批判し続けている。リトアニアの外交政策は、〈東〉と〈西〉のあいだに置かれている国々を〈東〉の魔の手から救い出すことを自国の使命としているかのようでもある。

3 支持されない欧州懐疑派

リトアニアで東方パートナーシップ首脳会議が行われていた二〇一三年一月、ヴィルニユスの目抜き通りであるゲディミナス大通りはいつもと様子が異なっていた。大通りの東端にある大聖堂広場から西端の国会までの道がすべて、EU加盟国二八カ国と東方パートナー諸国六カ国の国旗で飾られていたのが理由の一つである。しかし様子が異なっていたのはそれだけではない。同じ頃、大通りの中心部にあるヴィンツァス・クディルカ広場周辺で連日、憲法改正に関する国民投票の実施を求める署名活動が行われていたのである。

国民投票の発起人らが求めていた改正内容は多岐にわたるが、なかでも特に争点となっていたのが、外国人への土地売却のうち、リトアニア社会民主連合（Lietuvos socialdemokratių sąjunga 以下「社会民主連合」）、リトアニア中道党（Lietuvos centro partija 以下「中道党」）、民族主義連合（Tautininkų sąjunga）の三党は、二〇一二年の国会議員選挙で政党連合を組むなど、すでに協力関係にあった。左派の社会民主主義者と極右の民族主義者が手を組むなどというのは、それ以前では考えられないことであったが、しかしこれら三党には共通点もあった。それは、いずれも連立与党に加わっていた、あるいは過去に加わったことがある主要政党から分離して結党された点である。それぞれ、社会民主連合は一九九九年に社会民主党から、中道党は二〇〇三年にリトアニア中道連合（Lietuvos centro sąjunga）から、民族主義連合は二〇一二年に祖国連合から分離して結党された。^{*18} 欧州懐疑主義を掲げる三党に対し、それぞれ別の時期に連立与党の一翼を担ってきた社会民主党、リトアニア中道連合、祖国連合は欧州統合を積極的に推進してきた。社会民主連合、中道党、民族主義連合の三党はいずれも現在まで国会議員選挙で議席を獲得したことはなく、三党が政党連合を組んだ二〇一二年の選挙においても得票率はパーセントにも満たなかった。このことから、リトアニア国民の大半は〈東〉でも〈西〉でも

ないリトアニアなどは望んでいなかったことが窺える。先に述べたように、彼らの多くは〈西〉か〈東〉かという二者択一のなかで〈西〉こそがリトアニアの独立を担保するものと考えているのである。

4 ランズベルギス演説

ウクライナ情勢が緊迫化しつつあった二〇一四年二月一日、筆者はヴィルニユスの旧市街にあるピリエス通りに行った。二月一日はリトアニアで一つ目の独立記念日である。「一つ目の」と書いたのは、リトアニアには独立記念日が二つあるからである。二月一日は一九一八年にロシア帝国から独立したことを記念する日であり、一九九〇年にソ連からの独立回復が宣言された三月一日が二つ目の独立記念日となっている。一つ目の独立記念日には、ランズベルギス元最高会議議長が独立宣言が署名された建物のバルコニーから演説を行うのが、近年の習わしとなっている。その建物があるのが、このピリエス通りである。

この日ピリエス通りに集まった市民の多くはリトアニア国旗を手にしてしたが、合わせて欧州旗とウクライナ国旗を持ち合わせている者も少なからず見かけた。リトアニア

とウクライナはヨーロッパで運命を共にする存在なのだといわんばかりに、ウクライナ国旗を振ってリトアニアの独立記念日を祝っていたのには、少しばかりの違和感を覚えた。三月一日ならまだしも、二月一日にもウクライナ国旗を持ち出すか、と思い、興味深く眺めていたのだが、さらに興味深かったのは、その日のランズベルギスの演説であった。

この頃のリトアニアでは、ウクライナ問題と憲法改正に関する国民投票の二つが政治の話題の中心となっていた。いずれも二〇一四年のうちに進展があることが確実視されていたため、ソ連末期にリトアニアの独立運動「サーユードイス」^{*19}を率い、その後は祖国連合の指導者として欧州統合の中心的役割を果たしてきたランズベルギスが、これらの問題に関して何を語るかが注目されていた。以下が、当日の彼の演説の一部である。

「国民投票の」目的は、欧州連合と仲違いし、あわよくば、「国民投票推進者の一人である」シユリュジャス氏が宣言しているように、欧州連合から脱退することにあり。『当時冬季五輪を開催していた』ソチにいるプーチンは、そのようなリトアニアを夢見てい

る。土地 (žemė) のことばかりたくさん話している者「すなわち国民投票推進派」は、地図 (žemėlapis) を忘れていて。まるで学校に行っていないかのようなうだ。地図は、民主的なヨーロッパ (demokratinė Europa) が²⁰、プーチンのユーラシア (putinine Eurazija) が²¹のなかを示している。リトアニアはどちらを選ぶのか。ヨーロッパは要らないというのなら、それはユーラシアの方に沈むということだ。檻のなかに戻るといふことだ。『……』

「リトアニア人の」兄弟であるウクライナ人は何と言うだろう。彼らは先を見据え、ヨーロッパを選ぶ権利のために戦っている。我々は彼らを支援し、彼らに同情しているように見えるが、しかし我々のなかの一部は反ヨーロッパの投票を掲げているのだ。『……』

ウクライナ人は羨望の目で我々を見つめ、サーユードイスの例にならっているのだが、しかしシユリュジャス氏は「欧州連合は悪だ」というプーチンのプロパガンダを携えてウクライナを訪れている。驚いたウクライナ人はおそらく、失敗しないようにあれこれ考え、ヨーロッパに背中を向けるようになるだろう。

『……』

このような陰謀なのだ。誰も背中を二つ持ち合わせていないのだから、ヨーロッパに背を向ければ、笑顔でクレムリンの時計台を訪れることになってしまう。^{*20}『……』

必要なら、国民投票を静かにボイコットすることでヨーロッパ的なリトアニア (europietiška Lietuva) を守ろうではないか。そのような防衛方法もあるのだ。これは二月一日の義務でもある。すなわち、一〇〇年間のツァーリ支配からの独立、ヨーロッパ志向、そして民主主義^{*21}だ。

「誰も背中を二つ持ち合わせていない」という彼の言葉がすべてを表している。つまり、リトアニアは〈東〉には戻らないと決めた以上、〈西〉を向くしかない。〈西〉に向くのをやめれば、それは〈東〉に戻ることになる。欧州懐疑派が唱えるような〈東〉でも〈西〉でもない第三の道は、彼らの頭のなかにはない。彼らが理想とするのは、「ツァーリ「およびソヴェト」支配からの独立、ヨーロッパ志向、そして民主主義」である。そしてこのリトアニアの理想は、ウクライナにも押しつけられる。

おわりに

憲法改正の是非を問う国民投票は二〇一四年六月に行われたが、結局、投票率が一五パーセントにも満たない記録的な低さで不成立となった^{*23}。国民の多くは、ランズベルグスらが呼びかけたように、静かにポイロットすることによって「ヨーロッパ的なりトアニア」を選んだ。

このように、現在のリトアニアでは政治家も国民も多くがヨーロッパ志向を堅持しているが、こうした姿勢は、ロシアを脅威と捉えていることと表裏一体をなしていると言えるだろう。近隣の主権国家の一部がロシアに「併合」されるという事態を迎えた今日、リトアニアはよりいっそう強くロシアを脅威として認識してきている。ロシアが地域大国として影響力を持ち続ける限り、リトアニアの〈西〉への志向が今後もしばらく続くのは間違いない。ウクライナに対する支援も当分続けられるだろう。ランズベルグス演説からも明らかのように、リトアニアにとってウクライナ問題は自分たちの問題でもある。

注

- * 1 <http://www.kent.ac.uk/politics/gec/GECpolicypaper1.pdf> (September 30, 2014) : <http://www.lithuaniantribune.com/51179/> (September 30, 2014) : <http://www.lithuaniantribune.com/51210/> (September 30, 2014).
- * 2 <http://www.eu2013.lt/en/news/statements/statement-of-foreign-minister-of-lithuania-linas-linkевичius-on-decision-of-ukrainian-government> (September 30, 2014).
- * 3 <http://www.lrt.lt/naujienos/lietuvoje/2/30057/> (September 30, 2014).
- * 4 <http://www.lithuaniantribune.com/58028/> (September 30, 2014).
- * 5 <http://www.eu2013.lt/lt/naujienos/1/linkevicius-pasmerke-je-gos-panaudojima-pries-taikius-protestuotojus-ukrainoje> (September 30, 2014).
- * 6 http://www.3lrs.lt/pls/inter3/dokpaieskashowdoc_l?p_id=461385 (September 30, 2014).
- * 7 <http://urn.lt/default/lt/naujienos/lietuvas-uzsienio-reikalu-ministro-lino-linkевичiaus-pareiskimas-apie-pastarosios-nakties-ivykius-kijeve> (September 30, 2014) : <http://www.urn.lt/en/news/statement-of-foreign-minister-of-lithuania-linas-linkевичius-on-tonights-events-in-kiev> (September 30, 2014) : <http://www.eu2013.lt/en/news/statements/statement-of-foreign-minister-of-lithuania-linas-linkевичius-on-tonights-events-in-kiev> (September 30, 2014).
- * 8 <http://www.15min.lt/naujiena/aktualu/pasaulis/ukrainoje-viesinitis-1-linkевичius-svarbiausia-ven-gri-prispreios-glejimo-57-392163> (September 30, 2014).
- * 9 <http://www.lrt.lt/naujienos/lietuvoje/2/31778> (September 30, 2014).
- * 10 <http://urn.lt/default/lt/naujienos/lietuvas-uzsienio-reikalu-ministerijos-pareiskimas-del-ivykiu-ukrainoje> (September 30, 2014).
- * 11 http://www.3lrs.lt/pls/inter3/dokpaieskashowdoc_l?p_id=464777 (September 30, 2014).
- * 12 <http://nl.urn.lt/index.php?1292331208> (September 30, 2014).
- * 13 http://www.president.lt/lt/spaudos_centras_392/pranesimai_spaudai/smurtas_ukrainoje_turi_buti_nutrauktashml?ref=SevSevilCom (September 30, 2014).
- * 14 http://www.3lrs.lt/pls/inter/w5_sale_bals?p_bals_id=17638 (September 30, 2014).
- * 15 <http://urn.lt/default/lt/naujienos/lietuvas-uzsienio-reikalu-ministerijos-pareiskimas-del-ukrainos> (September 30, 2014).
- * 16 <http://urn.lt/default/lt/naujienos/urn-pareiskimas-del-rusijos-vykdomos-kyrymo-aneksijos> (September 30, 2014).
- * 17 <http://paulauskas.president.lt/one.php?tid=4994> (September 30, 2014).
- * 18 社会民主連合の名称は結党当時「社会民主主義」二〇〇〇

(Socialdemokratija 2000)』と、二〇〇三年に現在の党名に変更した。中道党の名称は結党当時「全国中道党 (Nationalinė centro partija)』と、二〇〇五年に現在の党名に変更した。

* 19 リトアニア改革運動 (Lietuvos Reformavimui Sajūdis 通称「サーニューゼイス)は、一九八八年にレズストロイカ支持運動として始まり、その後急速に成長して独立運動に発展していった。

* 20 今では、一九四〇年に、共産主義者によって構成されるリトアニアの人民議会がソ連加盟申請のためにモスクワへ代表を派遣したことを示唆している。すなわち、ヨーロッパを選ばなければ、リトアニアは再びロシアに併合されることを選ぶことになる。

* 21 演説の内容を日本語に訳すにあたって、以下のウェブサイトに掲載されている原稿を参考にした。 http://www.respublikat.lt/naujienos/nuomones_jir_komentarai/bus_isklausyta/vlاندsbergis_vasario_16aja_gasdino_briuselio_kerstu/ (September 30, 2014).

* 22 投票率が五〇パーセント以上であることが国民投票の成立要件となっていた。したがって、憲法改正に反対する者の多くは、国民投票自体を成立させないためにポイロットする手段を選んだ。

参考文献

石郷岡建 (二〇一四) 「ウクライナ危機とは、何だったのか? プーチン大統領の思惑とロシアの行方——疑問と考察」『ロ

シア・ユーラシアの経済と社会』九八六号、二二二頁。
 塩川伸明・小松久男・沼野充義・宇山智彦編（二〇一三）『ユーラシア世界 一〈東〉と〈西〉』東京大学出版会。
 浜田樹子（二〇一〇）『ヨーロッパ主義とは何か』成文社。
 Haukka, Hiski (2009) "Contextualizing and Qualifying Identities: Baltic-Russian Relations in the Context of European Integration." Eiki Berg and Piret Ehin (eds.), *Identity and Foreign Policy: Baltic-Russian Relations and European Integration*. Farnham: Ashgate, pp.161-170.
 Jakutinaite, Doviile (2009) "Neighbourhood Politics of Baltic States: Between the EU and Russia." Eiki Berg and Piret Ehin (eds.), *Identity and Foreign Policy: Baltic-Russian Relations and European Integration*. Farnham: Ashgate, pp.117-131.
 Lehti, Marko (2006) "Eastern or Western, New or False: Classifying the Balts in the Post-Cold War Era." Fabrizio Tassinari, Pertti Joenniemi and Uffe Jakobsen (eds.), *Wider Europe: Nordic and Baltic Lessons to Post-Enlargement Europe*, Copenhagen: Danish Institute of International Studies, pp.69-88.
 Miniortaitė, Gražina (2003) "Convergent Geography and Divergent Identities: A Decade of Transformation in the Baltic States," *Cambridge Review of International Affairs* 16 (2): 209-222.
 Viipišauskas, Ramūnas, Bruno Vandecasteele, and Austė

Vaznonyte (2013) "The Lithuanian Presidency of the Council of the European Union Advancing Energy Policy and Eastern Partnership Goals: Conditions for Exerting Influence," *Lithuanian Foreign Policy Review* 29: 11-37.
 Vonderau, Asta (2008) "Yet Another Europe?: Constructing and Representing Identities in Lithuania: Two Years after EU Accession." Tsyryma Darieva and Wolfgang Kaschuba (eds.), *Representations on the Margins of Europe: Politics and Identities in the Baltic and South Caucasian States*. Frankfurt: Campus, pp.220-241.

●著者紹介

- ①氏名……重松尚（しげまつ・ひさし）。
- ②所属・職名……東京大学総合文化研究科博士後期課程（地域文化研究専攻）在籍。日本学術振興会特別研究員DC2。
- ③生年・出身地……一九八五年、滋賀県。
- ④専門分野・地域……リトアニア地域研究。
- ⑤学歴……国際基督教大学教養学部（国際関係論専攻）、東京大学総合文化研究科修士課程（国際社会科学専攻）。
- ⑥職歴……ヴィルニウス大学東洋学センター助手（二七歳、一年半）。
- ⑦現地滞在経験……リトアニア・カウナス（二二歳、一年）、リトアニア・ヴィルニウス（二四歳、一年）、同（二七歳、二年）。
- ⑧研究方法……両大戦間期のリトアニアにおける定期刊行物や政府資料などを分析することが多い。
- ⑨所属学会……東欧史研究会、現代史研究会、The Association for the Advancement of Baltic Studies。
- ⑩研究上の画期……学部時代に留学したときの寮の同居人が、リトアニア生まれのロシア人であった。リトアニアでロシア人として暮らすことの息苦しさをたびたび語ってくれたことが、リトアニアのナショナルリズムについて考える契機となった。
- ⑪推薦図書……Timothy Snyder, *The Reconstruction of Nations: Poland, Ukraine, Lithuania, Belarus, 1569-1999*, New Haven: Yale UP, 2003. 昨今のウクライナ問題は、「ウクライナ人」とは何かを改めて考えさせられる契機となった。本書は、「ウクライナ人」や「リトアニア人」といったネーションがどのように作られて（「再構築」されて）いったのかを明らかにする。